

歴史の

大老暗殺

— 殿は生きておりますか? — (一八六〇年)

安政七年三月三日、江戸ははげしい春雪であった。

誠之助が、槍のけいこで汗ばんだ身体に一息入れようと窓を開けたときだ。男の叫び声が門から駆けこんできた。

「ご注意! 一大事でございます!」

息を切らしてしゃがみこんだ中間の前に、用人の六之丞が大刀を手にさげたまま現れた。

「何ごとぞ一大事とは。あわてるでない!」

家臣たち十数人、誠之助やけいこ連中も集まってきた。彦根藩の江戸屋敷である。駆けこんだ中間は、雪と泥にまみれ、肩から血を流し、息をきらしていた。

「たいへんで、ございます……、お城の門まぢかです……」

声も途切れがち。お城とは將軍のおわす江戸城のこと。

「お殿さまが、襲撃を受け、急ぎ、お報せに……」

「えっ?」誠之助は緊張で鳥肌がたち、ふるえが走った。

「なに、なんと申す、殿が? して殿はご無事か」

「いえ、しかとは、……早くお報せをと、ただ夢中にて」

「水戸の奴らめ。して人数は?」

「二十人ばかりかと。水戸かどうかは分かりかねます」

つい先ほど、十三歳の誠之助も重臣たちと、登城する殿の行列を見送ったばかりだった。

殿とは井伊掃部頭直弼、幕府の大老である。將軍が幕府の権威を強めようと、政治を行う老中の上に、独裁もできる「大老」職をおき、殿がその任に就かれていた。

彦根三五万石の藩主、幕府の最高権力者である殿が襲われるとは? ことは重大だ。屋敷内は騒然となった。

「応援だ、急げ!」

六之丞はひきつった声で、背後の藩士に命令した。

用人は家老の次だが、ここでは実際の指示を出す。

二十人ばかり、形相を変えて、勢ぞろい半ばで、ばらばらと武器をもって駆け出ていく。鉄砲隊もいた。

「女どもも雑刀をもて。奥方様をお守りいたせ」

誠之助らも、実戦用の鉢巻たすき、袴を腿上げ、槍を抱